
CHANGE TO THE GIRL

桜希 澪乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C H A N G E T O T H E G I R L

【Nコード】

N 9 5 4 9 E

【作者名】

桜希 澪乃

【あらすじ】

スラムダンクではあまり馴染みのない（というか認知度が低い？）
陵南高校の越野くん（でも一応レギュラー）。彼が突然、女の子になっちゃった！？彼は元の姿に戻るのか？コミカルなドタバタ劇です。

プロローグ く前兆

ある日、平和な陵南高校を襲った不可思議な事件。

それは一体何が原因だったのか、誰が犯人なのか、知る者は誰もいない。

もしかしたらこれは集団で見た、ただの夢だったのかも、知れない……。

* * *

とある日の、陵南高校2年D組の第一限は化学の実験の授業だった。

実験室で教師が説明を終えると、各班ごとに実験が開始される。始めのうちはこの班も順調に実験を進めていたが、3班の様子がおかしくなったのは、実験が中盤に差し掛かった頃だった。

「うわああっ！」

班の誰かが悲鳴をあげ、注目された次の瞬間には、3班の使用していた実験台の付近に煙が立ち込めていた。

「なにがあつたんだ！」

「そ、それが……何がなんだか分からないうちに、突然煙が……」「危険なガスかも知れないから、煙を吸うんじゃない、いいな！」

教師がそう叫んだ時、同じ3班の女子が悲鳴に似た声で教師に言った。

「先生っ、越野君が煙の中に……っ！」

その声を皮切りに、実験室には悲鳴が轟く。しばらくして騒動がおさまった時には煙も消え失せ、そして床には越野が倒れていた。

……視界に白い靄が掛かっっていて、周りが良く見えない状態がしばらくの間続いた。それがなくなると視界は次第にはっきりしてきて、瞼の裏が明るく感じた。

そこで越野はゆっくりと目を覚ます。それから上半身を起こした。何が起こったのだろうか……そう考えて、記憶の糸をさぐると、多少の時間で自分に何が起きたのかか把握できた。

化学の実験が途中まで進んでいた時だった。アルコール・ランブでフラスコの中の液体を加熱し始めて間もなく、突然煙が吹き出し、周りが見えなくなった。

誰かの悲鳴が聞こえた時にはもう、周りは全然見えなくなっていて、俺は何も分からないまま煙を思い切り吸い込んでしまった。

「やばい」。そう思った時にはすでに遅く、みんなの声が遠ざかっていった。

「俺……死んでない」

呟いた声が微かに高いのはきつと、煙を吸い込んだせいだろう。それでも助かったのは有り難い事だと俺は思った。なにせ遠くない過去に某集団テロの手によって、地下鉄内で有毒ガスが撒かれ、それを吸って死んだ人間が大勢いるからだ。

「よかった、無事で……」

そう言っつて、保健室のベッドから起き上がる。壁に掛かっている時計を見れば、もう午後2時を回っていた。とすると俺は丸々4時間近く眠っていたことになる。

我ながらよく助かったものだ。そう自分の強運を噛み締めてから、

保健の先生に声を掛ける。……が、返事はない。多分出かけているのだろう。仕方なしに書き置きを残して保健室を後にしようとした、まさにその時……。

俺はこのことが人生最大の不幸だったことを、思い知らされたのだった。

保健室を出て、自分の教室に入ろうとした時、越野は躊躇した。何故ならば、彼が保健室を出ようと思った時に知った事実が、余りにも衝撃的だったからである。

……越野が保健室を出ようと扉を開きかけると、出入口の扉のすぐ横の壁に設置されている大きな鏡に目がいった。それを何気なく見るとそこには自分の姿はなく、見知らぬ人物の姿が写し出されていた。

自分によく似た、少女。髪型も、勝ち気そうな瞳までもが越野に酷似している。しかしそれが、自分の姿であると信じるまでには多少の時間が必要だった。

「う、そだろ……？」

鏡に向かって呟いたが、そんなことをしても元に戻る訳はなかった。それでも彼は何度もその言葉を繰り返す。そうせずにはいられなかったのである。

そしてつい先程、どうしようか迷った末、仕方なしに教室へ戻ることを決意したのだが……。それでもさすがに教室の前で足が止まってしまう。

「悩んでいても仕方ないか……」

自分に言い聞かせるようにして、越野は勇気を奮い立たせ、教室の扉を開いた。

「ただ今戻りました。ご迷惑掛けてすみません……」

そう言つて教室の中へ入るなり、クラスメイトの反応は、前もつて予想した通りだった。

「君、何組の人？ここは2-Dだよ」

「……俺だよ、俺。越野だつてば」

信じらんねーだろうけど……。そう言つた最後の言葉は、ざわめきで掻き消されてしまつていた。

「うっそおーっ！」

「越野？ 本当に？」

「どうしてそんな姿になつちまつたんだ？」

クラス中が騒然となり、そのせいで数学の授業は中断されることになった。越野はクラスメイトの質問攻撃に、自分に降り懸かつた最大の不幸を思い知らされつつ、自分の知っている限りの事を話し始めた。

「……俺、もしこのままだつたらどうしよう……」

いつになく弱気に越野が呟くと、クラス中が静かになつてしまふ。この不幸な事態の適切な対処法が、高校生にできる訳もない。

「どうしよう……つたつて……なあ……」

「……う、うん……」

「保健の先生に相談しようよ、ね？」

「いないんだ、先生」

「え、いないの？」

「じゃあ、化学の先生。あの実験で越野君がこんな風になつちやつたんだから」

授業が終わると同時に、越野を含めたクラスの数名が化学教師の元を訪れた。

詰問調に詰め寄ると、教師は元に戻る方法を必死になつて探すと言つたきり、口を噤んだ。どうやら越野の姿が変わつてしまった原因については本当に謎らしい。

「一体俺はどうしたらいいんだよおっ！」

「越野、それじゃあ姿と一致してないつてば」

「その高い声じゃ、その台詞は似合わねえよ」

「お前らっ！ ヒトゴトだと思つて気楽に言つなよっ！」

「だけど……その姿じゃ、なあ」

「それに先生も元に戻る方法を考えてるつて言うし……」

「だつてお前、可愛すぎるぜ」

「ほんと。俺の彼女より可愛い顔してるんだもんな」

「……それ以上言つたらお前たち……ブツ殺すっ！」

「越野……やっぱ、その姿じゃ何言つてもムダ」

「……畜生……」

越野は拳を握り締め、肩を振るわせる。そして。

「俺はどんな事をしてでも、絶つ対に元の姿に戻つてやるからなあ

あっ！」

そう、握り拳で叫んだのである。

Act 1 放課後

「そうだ、ここは頼もしい魚住キャプテンに相談してみよう！」

残りわずかな授業を終えると、突然の不幸に見舞われた越野はスポーツバックを肩から引つ下げて、意気揚々と部室へと向かう。隣にいるのはクラスメイト兼、同じ部活のチームメイトの植草で、彼はなぜかうつむき加減で越野の半歩後ろを歩いている。

「どうしたんだよ、植草」

「いや、なんでも……」

そう言う割りには、声にも元気が感じられない。「変なヤツ」そう呟くと、大して気にも留めず、越野は足取り軽く歩いていく。

そして部室の前に辿り着くと、扉を一気に開き、いつものように元氣よく「こんにちは」と言つて中に入つていった。

「君、誰だい？　ここは男子バスケット部の部室だけ……」

自分の後輩にあたる一年の部員がそう言つて、越野は自分の身に変化が起きたことを改めて実感する。そして体を微かに震わせながら、囁くほど小さな声で言った。

「俺は、越野だ」

「え、越野……先輩？」

「なんだ、どうした一年」

部室の中から、三年の池上の声がする。そこで戸惑った表情の一年は振り返り、「池上先輩……」と、不安な声を隠しきれずに言った。

「どうかしたのか」

「それが……」

上手く言葉に表せず、口ごもつた一年を横にずらし、越野は入り口に向かつてくる池上の名を呼んだ。

「え……と。君は？」

「池上さん、俺です。越野です」

しかし池上は不思議そうな表情で首を傾げるだけである。

「実は俺、午前中にやった化学の実験でこんな体になってしまった……。おい植草っ！ 黙ってないで一緒に説明してくれよ！」

「……？ どういうことだ？」

「知りたいのは、こっちの方なんです！ 他の班は何ともなかったのに、俺の班だけ突然変な煙が出てきたかと思うと……。その煙を吸い込んで気絶して、目が覚めてたら、こんな風になっていたんだ」
「……こんな所で言っても仕方ない。ひとまず部室に入れ。植草、こいつは本当に越野なんだな？」

池上の問いに植草はただ黙って頷く。すると池上は、部室の中でこちらの様子を窺っている数人の部員を追い払うようにして、越野と植草を部室の中へ通した。

越野は部室に入るなり、中にいた魚住にも同じように簡単に説明をすると、相談を持ち掛けた。

しかしどんなに頼りがいがあっても所詮は高校生。しかも「なぜ、越野がこんな体になってしまったのか」という最大の疑問であり、原因が分からない。

更には教師ですら首を捻ったくらいだから、専門知識のない高校生には益々原因は不明であろう。

「俺……どうしたらいいんでしょう」

女の子が変わってしまった副作用か、越野は目尻に涙を溜めると上目遣いで池上と魚住に向かって言う。

「……………」

「……………」

「ど、どうしたんですか、池上さん、魚住さん」

心なしか、顔を赤らめて二人はそっぽを向いてしまう。それを首を傾げて「どうしたんですか、二人とも」と問い掛けるあたり、何も知らない残酷さだと、周りで様子を窺っている一年部員たちは思った。それ程に、女の子と化した越野は、なぜかとてつもなく可愛

かったのである。

*

*

*

「ちわーす」

授業終了は、どの学年・クラスも関係なく同じ時間であるにも拘らず、部活が始まってから30分以上も経過した頃、体育館に制服姿の仙道がやってきた。

「遅いぞ仙道っ！」

「すみません」

「いつもなんでこんなに遅れるんだ、お前はっ！」

キャプテンの魚住がボールを片手にそう怒鳴ると、首を竦めてすまなさそうな表情を作り、仙道は言う。

「これから気をつけます」

「ふん。お前のその言葉は聞き飽きた。さっさと着替えてこい」

そう魚住が言うと、仙道は間延びした声で返事をして部室へ向かおうとし、途中で足を止めた。

「あれ、越野は？ まだ来てないんスか？」

「越野は……」

口ごもり、困惑した表情で魚住は視線を泳がせる。仙道がその視線を追うと、そこにはショートカットの勝ち気な少女がＴシャツと短パン姿という出で立ちで不機嫌そうな顔を隠す事なく部活の様子を見ていた。

「誰ですか、あの」

「越野だ」

「え、ええっ！」

「何が原因でああなったかは、先生たちでも分からんそうだが……化学の実験中に変な煙を吸ったせいでああなったと、聞いた」

「女の子に、なっちゃったん……ですか？」

「の、ようだ」

そう言っつて、魚住は再び越野に視線を向ける。

彼 もとい現時点では彼女、は、口の中で何かをぶつくさ呟きながら苛立しげな顔で、部員たちがボール運びをしているのを、ただ見ている。

「全く、どうなっているのやら、おれには分からん」

そう言っつて仙道を見ると、

「……………」

何かを企んでいるような表情を、仙道は浮かべていた。そして越野に歩み寄る。

「おい、仙道っ！」

魚住の制止の声にも構わずに仙道は越野のすぐ隣までくると、女の子となった越野をまじまじと見つめてから尋ねた。

「越野？」

「んだよっ！」

怒りを露に越野は仙道を睨み付ける。それを見てにっこりと微笑み「本当に越野なんだ」と再び尋ね、越野が怒りを倍増させたのを、笑顔の崩さずに眺めると、ぽつりと呟いた。

「可愛いなあ、越野は。このままだったら、俺、交際申し込んだじゃうよ？ どお、俺と付き合わない？」

「……………」

仙道は怒りに打ち震えている越野をよそに彼（女）の肩を抱くと、言った。

「うん。ずっとこのままでいいよ。そして俺と付き合っつて、ゆくゆくは結婚しよう」

「ば…バカヤロウツ！ ふざけるのも大概にしやがれ仙道！ 俺は今すぐにでも元の姿に戻りてえんだ」

「いいじゃん。このままでも。越野すごく可愛いし。ねえ、魚住さん」

「あ……ああ……」

「魚住さんまでっ！ 酷い、何て事を。俺がこのままだったらインターハイも、冬の選抜も出場できないじゃないですか、スタメンの俺が！ それでもいいって、言うんですかっ」

「そ……それは困る、が……」

「でしよう？ 俺は何としてでも元の姿に戻らなくちゃいけないんです」

「でもお……このまま、マネージャーでもいいと思うな、俺は」

だって、うちマネージャーいないし。やっぱり湘北みたいな女子のマネージャーが欲しいよな。

そう呟いて、魚住の顔を覗き込み。

「そう、思いません？」

仙道の問いに、魚住はふと何かを考えてから。

「……おれは知らんっ！」

魚住はそう怒鳴って部員たちの輪の中に入っていく。要するに、キリのないこの話から逃げ出したのである。

「あああ……魚住さん。俺は信じてたのに……」

涙目でそう呟いた越野は本当に、誰が見ても可愛い、いじらしいと思えるほどで。仙道はその越野を見て「可愛いっ！」と叫ぶと、越野をきつく抱き締めた。しかしその十秒後、越野は見た目とは異なる、持ち前のその性格と態度で仙道に拳を見舞った。

とはいえ、姿が女の子となっている越野が相手では、仙道はそれをなんとも思わない。どころか「こんな子に殴られるならいいよなあ」などと、殴られながらも呟いていた。

……結局、部活らしい部活はできる訳はなかった。仙道がしつこくも越野に言い寄り続け、それに怒りまくっている越野が仙道を殴り付け……それでも仙道は懲りると言うことを知らずにまた違っこ

とを言つて越野を更に怒らせる。そういった事をもう何遍も繰り返していた。

そして部活終了時間になるとまた、そこで一騒動起きたのである。

越野は自分の姿が女の子に変わってしまったことを忘れ、いつものように堂々と着替え始めてしまい……思春期真っ盛りの男子高校生たちはそれを見て慌ててしまったのである。そして部室は流血大惨事と化した。

急いで越野から目を背け、顔を真っ赤にしながら、他の部員たちはこそこそと、しかし素早く着替えを済まし、急いで部室を出ていった。

「越野お……いくら自覚症状がないからって、それは刺激的すぎるよお」

仙道ですら、珍しく顔色を変化させ、おどけて言う。そこでやっと越野は自分の立場を理解し……「うわああっ！」と絶叫したのである。

いくら自分の外見が女の子となったとはいえ、内面は男のままなので、越野自身にもそれは刺激的であったようだった。

「ダメだ……オレ、このまま越野先輩が元に戻らなかったら、そのうちもしかしたら先輩のこと襲っちゃうかも知れない」

今の衝撃で、一年生の誰かがそう呟くのは、きつと無理ならぬことであるかも知れなかった。

Act 2 越野家

「ただいまあ」

そう言つて越野はいつものように玄関扉を開いて言つと、やはりいつものように母親がスリッパを鳴らしながら駆け寄ってくる。

「お帰……り……?」

そこまで言つて母は越野の姿を見つめ「どちら様?」と尋ねた。

「やはり気付いちやくれねえか」そう呟き、越野は今日何度目かの『自分がこうなつてしまった理由』を母親に説明し始めた。

「あら、まあ」

中年女性……とりわけ子供を持った母親特有の感嘆の声を漏らし、自分の息子の変わり果てた姿を見る。「本当に宏明なの?」

「そうだつて、言つてんだらうがつ!」

「そうよねえ……こんなに言葉遣いの悪い女の子はいないし……それにその言い方、宏明には間違いないみたいだし……」

さすがに母親と言うべきか、息子の特徴を掴んでそれで確信し、

「さ、あがんなさい。もう御飯の時間よ」と言つて踵を返した。

夕食を食べるに至つて、食堂の自分の席に着くと、再び「この人、誰?」という質問を受けた。したのは越野の妹である。

そして越野はそこで大まかな説明をし……今度は母が合の手を入れてくれたお陰で随分と楽に説明する事ができた……食事が始まつた。

いつもなら大して会話もせず、黙々と食事をするのが越野家の習慣だが、さすがに息子の性別が逆転してしまつたという衝撃の事実のためか、いつもより会話の多い食事時間となつた。とは言つものの、妹の質問攻めにあつたと言う方が正しかったのだが。

「なんでこんな姿になっちゃったの？」

「どうすれば元に戻るの？」

「それより本当に元に戻るの？」

「もし元に戻れなかつたらどうするの？」

食事をしながら延々と同じような質問を、越野の妹は続ける。それを「それは俺だつて聞いてーよっ！」と怒鳴りつけることが夕食の間続いた。

「でも本当に、元に戻れなかつたらどうするんだよ、俺」

勝ち気な性格で有名な越野が、家に戻ってからさすがに不安さを増したのか、そう呟くと、母は食後のお茶を入れながら言う。

「そのまま女の子でいたら……そうねえ。越野家から二人もお嫁に出さなくちゃいけないのね。それは寂しいわあ。宏明が可愛いお嫁さん貰ってくれるの、夢だったのにねえ」

「そう言う問題じゃ、ねえだろっ！」

母の言葉に越野は、部活のときに仙道が言った「ゆくゆくは結婚しよう」の未来予想図を頭に浮かばせる結果となり、そのため更に苛立ちを増したのか、越野はテーブルを叩き付けながらそう怒鳴る。
「なに怒ってんのよ」

「……な、なんでもっ、ねえよ……」

「さては学校で何か言われたのね。まさか、もう誰かにプロポーズされたとか？」

いつもは素っ惚けたことばかり言う母がここぞとばかりに勘を働かせて言うと、越野はふいと顔を背ける。

「で、誰に言われたの」

「……仙道」

「あらあ、仙道君ならいいわ。そうね、もしこのままだったら、仙道君に貰ってもらいなさい」

今ここに仙道がいれば、今の言葉で彼はきつと涙を流して喜んだであろう。それを想像して顔をしかめると、

「息子の幸福をまじめに考えてくれよ！」と叫び、越野は出された

お茶を啜った。

「ずるいつ！ 私が仙道さんのこと好きなの知ってて、お兄ちゃん
は仙道さんと結婚しちゃうのっ？ そんなの、ずるいつ！」

「っだ あっ！ そんな事したくもねえよ」

「絶対よ、約束だからねっ！」

関係のないところで真剣に怒っている妹をなだめすかし、越野は
再びお茶を啜る。

「母さんも。そんなこと想像するよりも、もっと建設的なことを考
えてくれって」

「でも、元に戻る可能性がどれ位だか分からないうちは、ずっと
このままでいると仮定して、これからどうやっていくかを考える方
が、建設的じゃないの？」

そう、極めて建設的なことを指摘して、母はヒヨコ模様のエプロ
ンをしたままの胸を反らし「えっへん」のポーズを取ると、自分で
入れたお茶を啜った。

それを見て、母では頼りにならないと考え、越野は新聞を読んで
いるまま、こちらの話にも乗ってこない父に言う。

「父さんもっ！ さっきから黙って新聞読んでないで」

「……もしこのままだったら、名前も変えなきゃならなあ。それ
より、役所にはなんていって届ければいいんだろっな」

新聞から目を放さずに言った一家の大黒柱の言葉に、越野は愕然
としながら肩を落とす。「もういい。俺はもう誰にも相談しねえ…

…」

脱力した声でそう言うと、越野はとぼとぼと階段を上った。

*

*

*

ごろりと床に寝そべって、越野は盛大な溜息をつく。

昨日の今頃は自分はまだ男で……部活の後でへとへとになってたっけ。そう思うと、いま自分が置かれたこの状況が恨めしくなる。なぜ化学の実験で、こんな姿にならなければならぬのだろうか。それより、なぜ化学の実験中にこんなことになったのだろうか。

これがもし（漫画ではないが）悪の秘密結社お抱えの科学者の作業もしくは、某・軍組織の秘密実験の結果ならありうることだ。

とはいえ、そんなことはこの時代、この世界では有り得ないのだが。まさに漫画や小説の中でなければ。

なのになぜ、一介の高校生が、化学の実験中にこんな体にされなければならぬのだろう。何かの陰謀でもなく、秘密の実験でもなく。しかも、なぜ自分だけが。

考えれば、疑問は果てしなく浮かび上がる。

なぜ、こんな事になってしまったのか。

元に戻る方法はあるのか。

本当に元に戻るのか。

もし戻れなかったらどうなるのか。

そして、自分はその時どうすればいいのか。

妹にぶつけられた質問と全く同じ疑問……しかしそれこそが最大の疑問である……を思い浮かべ、その疑問のどれ一つも自分では対処しきれないことを悟る。

どう考えても、何が原因でこうなったかが分からない以上はどんなことをしてもすべては謎のままであろう。

「……ちつく、しよお」

そう呟いて、越野は寝返りを打つ。そこへ。

「宏明い、お風呂、入んなさい」

と、階下から声がした。仕方なく、越野は立ち上がる。そして

「風呂入って、気持ちを切り替えるか」

と言いながら部屋を出た。

そして彼（中身）は、風呂場にて、現在おかれている立場上での、最大のピンチを味わうこととなる……。

Act 3 翔陽高校

「こおしのおー。迎えにきたよお」

午前7時15分。

いつもなら朝練に出てこずに、一限ですら遅刻する仙道が何をとち狂ったのか、朝も早くに越野家の玄関先でそう言う。

「なにしにきやがった、この野郎」

見た目とは全く異なる、ぞんざいな態度で越野が言うと、にっこりとした形容できない笑みを浮かべて

「おはよう」と仙道は言い、それから続けた。

「あ、やっぱり元に戻ってなかった？ それは嬉しい……」

言葉が続けようとしたが、剣呑な表情に変化した越野の顔を見るとさすがに続けられなかったようで、仙道は途中で話題を変えた。

「あのさあ、今からちよつと、俺に付き合ってくれない？ もしかしたら越野の姿が元に戻るかもしれないからさ」

「ほ、本当かつ！」

「もしかしたら、だけど……」

「行く！」

仙道が言い切らないうちに越野はそう返事をする、スポーツバツグを取りに行き、それを肩に引っ掛けると

「さあ行こう。どこに行くんだ？」などと、さっきまでの不機嫌さはどこへやら、上機嫌でスキップでもしそうなほどの軽い足取りで歩き出す。

「越野……見た目も変わったけど、性格も変わった？」

そう独りごちながら、仙道は越野の横に並んで歩き出した。

「で、どこに行くんだ？」

機嫌をよくした越野は、口元をほころばせながら仙道に尋ねる。

その表情は男であった時の越野なら、余程のことがない限りは絶対にしないであろうというほど珍しい表情で、特に仙道にこんな表情を見せるのは、滅多に無いものである。

大概越野は仙道の前では怒った顔か、仏頂面、目くじらを立てた表情、あるいは仙道の起こした暴拳に泣き叫ぶ顔……など、あまりいい表情をしてくれない。とは言うものの、それはすべて仙道が原因を作っているのだが……。

また、仙道以外の人間の前ではそんなに不機嫌そうな顔はしないのだが、さすがにここ一年半近くで、仙道と接する機会が多くなつたためか越野の顔の筋肉は、怒つたような表情ばかりを作り続けたせいで、最近ではそれ以外の筋肉は動かされていない。

要するに仙道と接してばかりいたために、越野は怒っているような顔しか作っていないのである。だから笑顔なんてものはまずお目に掛かれないし、しかも、作り物の笑顔ではない、本物の笑顔となつたら本当に、極々珍しい貴重なものなのである。

それを簡単に披露して下さったことを、仙道は複雑な気持ちで見つめる。

これはいいことなのだろうか、それとも……。

そう、考えて、それでも深く考えずに「ま、いつか」などと結論を出すところが、仙道たる所以である。

「仙道、聞いてんのか？ 俺をどこに連れて行ってくれるんだ？」

で、本当に元に戻るんだろうな……などと呟きながら、越野は期待を膨らませた子供のような顔で仙道の顔を見つめる。

その仕草が今の越野の姿とぴったりマッチしていて、やっぱりこのままでいて欲しいよなあ……などと思いながら、仙道は言う。

「翔陽高校。藤真さんにさ、相談しようと思うんだ」

言った途端、越野の表情はいつものそれと変化し、拳を作ると仙道目掛けて降り下ろした。

「ったあ……」

「やっぱりお前をアテにしたのが悪かつたんだ……。お前がいつも

と違って、真剣に俺のこと考えてくれてたと思っていた俺が馬鹿だった」

「そんな事ないよ。俺はちゃんと越野のことを考えてるって。だから、藤真さんの所に行くんじゃないか」

「何故そうなる」

「だからあ、俺の見たところによると、藤真さんも越野と同じだと思っただよ、俺。それで、対処法とか、その後のこととかを相談すれば……」

言い終えないうちに、再び越野の鉄拳が仙道に命中する。

「いったあい」

「お前な、どうすればそんな風に物事、考えられるんだ！」

そう怒鳴った越野に仙道は

「だあいじょおぶ。きつと藤真さんがなんとかしてくれるって」と、胸を張って言う。

「お前みたいいな馬鹿にこんな事を考えさせたのが俺の敗因だ……」
それを聞き、越野はがっくりとうなだれた。

*

*

*

午前7時40分。

結局越野は仙道と一緒に翔陽高校へきてしまった。

仙道は「体育館、どこかな？」などと言いながら辺りを見回し、おおよその見当をつけると越野を連れて歩き出す。

「朝早くから、どうもすみません」

そう言っつて、仙道は体育館の扉を開いて言う。すると一斉に視線が注がれた。

「仙道？ 何しにきたんだ」

ゆつくりとドリブルしながらこちらの方へ寄って来てそう尋ねた花形に、にっこり笑顔を返すと仙道は

「藤真さんに用があつて」と答える。

「藤真さんは？」

「インターハイ前の大事な時期に、陵南のエース自らが偵察にきたのかい？ 仙道」

さらりと言うと藤真は、いつの間にか仙道たち二人の周りを取り囲んでいた大男の群れの中からひょこりと現れる。

「あ、藤真さん。実は相談があつて……」

そう言った仙道に「試合に出るなと言う相談なら、きっぱりと断るよ」と言つて、

「で、なんの相談だ？」

と、尋ねた。

「ところで、隣にいる可愛い子は誰だ？ また新しい彼女か、仙道」

「また？ 新しい？」 そう顔をひくつかせて尋ねた越野をうまく「まかして、仙道は愛想笑いを浮かべる。「違いますって」

そして視線を越野に移し。

「で、相談つて言うのは、実はこの子のことなんですけど」

「悪いが、お前の代わりに付き合えと言うのはお断りだぞ」

「違います。そんなんじゃないやありませんってば。だから、話を聞いて下さいって。実はこの女の子……越野なんです」

仙道の一言で、その場は凍り付いた。そして数十秒後、騒然とする。

「越野？ 越野つて、陵南のガードの越野だよな」

「でもあいつは男だろ？ 女の子である訳が……」

「いや、実は女だったのを隠していたのかも知れん」

「そんな、馬鹿な」

「漫画じゃよくある話だ」

「それにしたつて……」

翔陽の皆様方がそう話しているのを仙道は「だから最後まで人の

話を聞いて下さいよお」と言っつて、越野がこんな姿になってしまつた理由を簡単に説明する。

「で、それで僕になんの相談があるんだ？」

「だから、藤真さんなら、こういうことになつた場合、どうにかできるんじゃないかな、と思ひまして」

「どうして僕にそんなことができなきゃならない」

「だつて藤真さん、むかし女の子だつたんじゃない」

そこまですつたところで越野のメガトン・パンチと、藤真の容赦のない張り手が仙道にクリティカル・ヒットする。

「お前はどうすればそんな考えができるんだつ！」

藤真が怒鳴りつけるよりも早くそう言つたのは越野で、その声を聞いて、翔陽メンバーの数人が「やっぱり声が女の子だ」などと囁いている。

「でも前はこんな声じゃなかつた気がするが……」

「じゃ、やっぱり女の子になつたつてのはホントのことなんだ」

そんな声を聞きながら越野は体を微かに震わせ、それでもなんとか色々なもの 悔しさだとか、怒りだとか、哀しさだとか を耐えて言つ。

「藤真さん、どうもすみません。うちの大馬鹿者のせいで」

「いいよ。ここまですごくはないけど、いつも言われ慣れてるから」

そう言つて艶やかに笑う藤真と、「本当にすみませんでした」と言つて謝つてゐる越野の二人を角度を変えてみれば……。

「うーん……まるで女子校にゐるみたいだ」

などと、仙道を含めた数人が呟くのも、無理はなかつた。

*

*

*

「あーあ。結局なんの解決法にもならなかつたねえ……」

そう呟きながら、仙道は翔陽高校の門をくぐる。

「馬鹿野郎。藤真さんがそんな事できるわけないだろう」

「だけど……やっぱりあの人、男だったんだなあ」

「……………」

「あんなに女の子みたいな顔してるのにねえ」

言いながら、仙道はつい先程起こった出来事を思い出す。

本当に、女の子になったって、言うのかい？

はい。何が原因だかは、良く分からないんですけど……。

でも、僕には何もしてやれないよ、残念だけど。

そう、残念そうな顔で（それが本心からであるかは分からないが）藤真が言うと、越野は首を振り、真面目な顔で言う。

そんな事、分かっています。でもこの仙道が……。本当にすみません。

いいけど……。

藤真はそう言うと、越野の胸に手を当てる。そして。

本当だ。

……………っ！

驚きのあまり、声にならない悲鳴を上げている越野をよそに、藤真はしばらくの間、越野の胸に手を置いたままだったのである。

あ、藤真さんてば、どさくさに紛れて。

あ……すまん。でも……本当に女の子になっているとは……。

とかなんとか言いながら、実は結構それが目的だったとか？

いけませんよ、仮にも去年全国に行った程有名なチームの監督ともあろう人が。

でも、藤真さんがそんなことするなら、俺も……。

そう言って仙道が伸ばそうとした手をぴしゃりとはたいて、越野は声を出して悲鳴を上げる。そこで我に返って藤真は顔を赤らめて「すまない」と謝った。

しかし、藤真の取ったその行動で、翔陽メンバー全員がかなりの衝撃を受けたことは、確かなことだった。

「……………」

「藤真さん、役得だよなあ……………」

そう呟いた仙道の頭を思い切り殴り付けて、越野は怒鳴る。

「お前なあっ！ 朝練サボって、結局なんの解決にならなかった上に、翔陽の人達の邪魔までして………… 更には俺の貴重な時間をも無駄にしたんだぞっ！

さっさと学校へ行かなきゃ、もう遅刻だっ」

「越野お、一つ、いい？」

真剣に怒って怒鳴っている越野を無視するように、仙道は相変わらずの呑気な声で言う。

「あのさあ………… いくら中身が男だって言っても、仮にも今見た目は女の子なんだからさあ。せめてYシャツの中に、Tシャツ着てくれない？ でないとさあ………… ちよつとその格好、刺激強すぎるよ」

俺はそのままでもいいとは思っけどさ。凄くそそられるよね、その格好。

そう続けて呟いた仙道に、顔を真っ赤にしながら（それが恥かしさのためか、それとも怒りのあまりか………… 多分両方であろう）越野は仙道に拳をお見舞いした。

「は…………、早く学校へ行くぞっ！ でないと本当に遅刻になる……………」

そう言って走り出そうとする越野の腕を掴んで制止させると。

「じゃあ、次は………… あそこへ行こう」

仙道は越野の腕を掴んだまま、意気揚々と歩き出した。

Act / 4 湘北高校

「っだ ああっ！ 手を離せ、このバカヤロウがっ」

そ喚き散らしている越野を完全に無視して、仙道は越野の腕を掴んだまま引き擦るようにして歩き続ける。

そして辿り着いたのは、つい先日練習試合をし、なんとか最後の数秒で逆転勝ちをした相手校、湘北高校だった。

「なんでこんなとこばっかり連れて来るんだ、お前はっ！ しかも、もう授業始まつちまつてるじゃねーかよっ！」

「じゃあ、一時間待とう」

「だーからっ！ なんでそうなるんだっ。俺たちも早く学校へ戻るんだ！」

「でも、せつかく来たんだからさ」

「だいたい、湘北なんかに来たって、誰もこの事の解決法は分かんねえに決まつてる」

うちの化学の先生ですら分かんねえのに……そう呟く越野を無視したまま、仙道は一人勝手に何かを言い続けている。「ホントに越野可愛いよなあ」

「お前実は、俺の姿がこんな風になったのを単に楽しんで、色々連れ回ってるんじゃないだろうな」

「やっぱり越野はこのままの方がいいよなあ……可愛いし」

「……お前！」

結局その後、越野が怒鳴り、それを仙道が無視し、それにまた腹を立てて越野が怒鳴り……と言ったことを延々続けているうちに、あつと言つ間に一時間が経過し、仙道は笑顔を浮かべると越野を掴んで湘北高校の中へと入っていったのである。

どうやら仙道は上手く越野を騙し込んで自分のペースに巻き込むことに大成功したようだった。最終的に越野はそれに気付き、顔に「すっげームカツク」と書き込んで、

「やられた……」と、呟いた。

* * *

「ちょっとすみません。この辺でバスケット部の人達が一番近くにいるのって、誰ですか？」

愛想笑顔を浮かべて仙道が尋ねると、女生徒は顔を赤らめながら親切に案内してくれる。

それを横目で見ながら「絶対こいつってまともな人生送れねえに違いない」などと呟きを漏らしながら越野は仙道に掴まったまま廊下を歩く。

「大体、自分の学校の生徒かどうかも分からねえのに、こんなに無防備に案内するなんて神経が信じられねえよ」

いくら県立で……しかも夏服だから、どの高校も、特に男子は見分けがつかないからとはいえ……。

「何さつきからぶつぶつ言ってるのさ、越野」

「……なんでもねえよ」

「あの……ここですけど。2年の、宮城君のクラス」

「どうもありがとう」

そう、にっこり笑顔で言うと、女生徒は「いえ……そんな」などと顔を赤くしたまま呟くと、じゃ、これと言って軽く頭を下げると駆け出す。

「やっぱりああいいう反応、欲しいよなあ……越野」

「俺は好きでこんな姿になった訳じゃねえ。それに、何が楽しくてそんな事しなきゃなんねえんだ」

「それは、俺のため」

「バカヤロウ！」

そう怒鳴った越野が拳を振り上げるのを見て、それをすんなりか

わすと、教室のドアを覗き込んで、「宮城君います?」などとやはり女生徒に向かって尋ねる。すると間を置かずに宮城が返事をして現れた。

「誰か、呼んだか?」

「うん、その背のおつきい、かつこいい人」

女生徒の言葉に宮城は辺りを見回し……仙道の顔を確認すると一瞬驚いた表情になり、それからすぐに

「タイムンはるぞ」と言わんばかりの不良特有の顔を作り、こちらに寄って来る。

「なにしにきたんだ。ヒトの学校にまで勝手に入り込んで」

「いやあ……最近見掛けなかったけど、どうかしてたのか」

練習試合の時もいなかったし。そう続けた仙道に「ガン」を飛ばして

「ケンカ売ってんのか、テメエ」と、ドスを効かせて言うと、仙道はいつもの呑気な……ただし宮城から見ればただ無精に腹の立つくらい憎らしい……顔を作ると。

「実はさあ……」

と、呟いた。

「この、隣にいる子、なんだけどさ」

「その女の子がどうした」

「越野なんだ」

「はあ? お前いつから人間の性別が分からなくなるくらい目を悪くしたんだ?」

そう、目だけは相変わらず鋭い宮城に、へらりとした笑みを浮かべたまま「信じられないとは思っけど」と言いながら、仙道は翔陽の人間に言った通りのことを、宮城にも説明する。

「……と、言う訳なんだ」

「で、それとオレとがなんの関係があるんだ?」

やはり、誰もが同じように聞くと、「だから、何かいい対処法で

もないかと思つて、相談しにきたんだ」と、続ける。

「……越野？ 本当に？ 何かの間違いじゃなく？」

驚きの余り、目を丸くしながら宮城は越野の顔を覗き込む。

「自分でも信じたくねえけど、俺は越野だ」

「最近見ないうちに髄分と変わり果てた姿になつちまったな、越野」

「ウルセエ。好きでこんなになつたんじゃないんだ」

そう言った越野の声を聞いて宮城は、嘆かわしいといった感じで
呟く。

「ホントに声まで高くなつちまつて……」

『お兄さん、悲しいぞお』と、言わんばかりの感情のこもり方である。それを聞いて、むっとした表情を作ると、越野は「うるせえ……」と呟く。

「更にお前、背まで縮んでんじゃないか。168センチのオレと、
たいして変わんなくなつてるぜ」

宮城の言葉に、越野はぎよつとしながら慌てて宮城の隣まで行くと、ぴつたりと寄り添うようにして、それから上目遣いで自分と宮城を見比べる。

そして自分の右手を自分の頭の頂上と、宮城のそれとを何度か往復させて身長を調べようと試みる。それでも良く分からなかったよ
うで、越野はなぜかむすつとした顔をしている仙道に、

「おい、仙道。どっちが大きい」などと、まるで伸び盛りの小学生
のように尋ねた。

「うーん。どっちも変わらないけど。しいて言えば、宮城かなあ」

「なにっ！ じゃあ、6センチ以上も縮んだって言うのかっ！ 畜
生、何だつて俺がこんな目に……」

そう、悔しそうに呟いた越野に、宮城がほんの少し嬉しそうな表
情で上辺だけの慰めの言葉を投げ掛ける。

「うるせえよ、宮城」

越野がそう言つて不機嫌な顔を見ると、間に仙道が割り込んで
き、越野に言う。

「随分と仲よさそうだけど？」

「ああ……知らなかったっけか？ 宮城と俺は中学が近くだったから、いつも練習試合とかしてたんだ」

そう笑顔で言った越野に「ふうん、そうなんだ」と不満げに仙道は呟く。どうやらこの姿で自分以外の男と仲良くするのがお気に召さないらしい。

「に、しても……越野」

「なんだよ」

「その姿と声で、その言葉遣いは絶対に合わねえ」

そう言った宮城の言葉に、仙道が大きく頷きながら賛成すると、越野は作った拳を震わせた。

「だから、仙道。お前は何のために湘北まで俺を連れてきたんだ。

俺の姿が元に戻るかもしれないから付き合えといったのは、ただの口実か？」

「そんな事はないよ。あ、宮城、実はさ……」

ここに来たのは理由があつて……と続けて、仙道は言った。

「ほら、何て言っただけ？ マネージャーの人」

「彩ちゃん？」

「そう……その人に相談があつてさ」

「彩ちゃんに交際を申し込むのなら、他を当たってくれ」

「違つて。越野のことだし、相談しようかと」

そう言うと、宮城は訝しげな顔をしながらも、彩子に会うきっかけができたのをいい事に「分かった。案内する」と言って歩き出す。そして教室2つ離れた所で立ち止まると、ドアの向こうに顔だけ突っ込んで彩子を呼んだ。

「なあに、リョータ」

「あ、彩ちゃん」

にぱつと笑顔を作ると、嫌々ながらといった顔をしている彩子に大まかな説明をし、仙道を振り返った。

「仙道……なんでここに」

そう、不審げな口調で呟く彩子に、宮城は言う。

「ん、なんだか彩ちゃんに相談があるとか」

「なによそれ」

「それがさ、仙道の隣にいる女の子なんだけど……」

「あ、あの可愛い子？ それがどうしたの」

「それが、実は……陵南の、越野なんだよ」

「ええ、なんですってえ」

驚いて叫んだ彩子に「彩ちゃん」と言っ、宮城は続ける。

「ま、詳しくは仙道から聞いてよ」

「分かった、そうするわ」

「でも彩ちゃん、仙道に言い寄られても絶対になびかないでね」

そう言った宮城に「はいはい」と気のない返事をして、彩子はずっと自分たちの様子を窺っていた仙道の側まで寄っていった。

彩子は仙道の側まで来るとぞんざいな口調で「何の相談？」と、ぞんざいに言う。

つい先日の練習試合の恨みがまだ残っているのか いや、多分あの事は絶対に記憶の隅から消えることはないであろう 態度そのものが険悪なものを含む。

「彩子さん、駄目だなあ。そんな顔しちゃ。せっかくの美人が台無しになりますよ」

愛想笑いの表情で言った仙道を思い切りねめつけると、彩子は怒りを無理に押さえた声で再び要件を聞いた。

「多分、宮城から説明があったとは思っけど……」と前置きして、仙道は話し出す。

そして要点をまとめた簡単な説明が終わると仙道は「それで相談と言うのは」と言っ、彩子の反応を確かめてから続けた。

「女の子になった越野に、マネージャーのすべてを教え込んでもらいたいんですよ」

そう言った仙道に、越野が怒鳴りつけるよりも早く、彩子が怒鳴った。

「ばっかじゃないの、あんたはっ！」

そんな下らないこと考えるよりも、越野が早く元に戻る方法、真面目に考えてやんなさいよ。仮にもチームメイトで、更にはスタメンでしょ、越野は！ それを……っ。

そう、本気で怒り、怒鳴った彩子に「ああ……彩子さん」などと呟き、感激のあまりか、越野は目を潤ませる。

「だいたいねえ、他人の学校に勝手に入り込んでそんな相談しにくる馬鹿、あんたくらいしかいないわよ！ もういい加減そんな馬鹿やっつてないで、さっさと陵南に戻りなさい。私も授業あるからもう戻るわよ」

口答えする材料も見つからない、呵責のかけらもないような言葉を弾丸の様に投げ付けると、彩子は自分の教室へ向かって歩き出す。しかしすぐに踵を返すと、

「越野。あんたがそんな風になったのもそうだけど……仙道に振り回されてるのには、本当に同情を禁じ得ないわ。でも、そんな馬鹿放っておいて、ちゃんと前向きにしてなさいね」

と、人さし指を越野に突き付けて言うと、再び歩き出した。

「彩子さん……言う事はきついけど、なんていい人なんだ……」

真剣な表情でそう呟いた越野に、「そうかなあ」と返して、苦汁の色を顔に浮かべると、口の中だけで何かを呟き、仙道は越野の顔を見る。

「越野、じゃ行くっか」

「もう、俺はこれで本当に陵南に戻るからな」

彩子の激励に勇気づけられたのか、越野はきっぱりとそう言う。すたすたと歩き出す。それを慌てて追いかけて、みたび越野の腕を取ると、仙道は嫌がる越野をよそに、越野を引き擦りながら湘北の後にした。

Act 5 海南大附属高校

「でー、次はどこ行くんだー」

もう完全に気のない声で、越野はだらだらと言う。

「誰に何の相談するんだ。牧さんか、神かー？」

「なんで分かつちゃうのかなあ」

そう聞いた仙道に、だらりとした口調のまま越野は答える。

「翔陽、湘北ときたら、もうお前の事だから海南にも行くって決まってるじゃねーか」

そう言つて、続ける。

「でー、何の相談に行くんだー？ どうせお前の事だから、単に俺を見せびらかしに歩き回ってるだけなんだろう。もう、分かつてるんだよ。俺がこんな悲惨なメに遭っていても、それすらお前にとっちゃ『お遊び』のタネになるんだよな。お前に相談して、助力を頼んだ俺が馬鹿だった。もういいよ。どうにでもなれつてんだ。せつかくの皆勤賞すらこんなことでペアにされて……」

なぜ越野がこんなにやる気のない、自暴自棄ともとれる態度を取っているのかと言うと、湘北高校を後にして、海南校へ向かう前に「今日は早起きしたから、朝ごはんまだなんだよね」と言いながら、仙道は近くのファースト・フード店へ立ち寄り、そこでのんびりと朝食なんぞを食べ始めてしまったからである。

かくいう越野も、仙道に朝早くから引き擦り回されていて朝食は取る暇なんてなく、そこで仙道のペースにまんまとはまり込み、ハンバーガーをぱくつくハメとなった。

しかし、仙道のおごりで食べた「ダブルバーガーセット（ダブルバーガーにポテトのLサイズと、ドリンクが付いているもの、税込価格630円）」は、空腹の越野にはありがたいものであったが彼

は、皆勤賞という大きな代償を支払うことになった。

それで苛つき、自暴自棄にも似た態度を取っているのである。

「なに言ってるのさ越野。俺は本当に越野のことを心配してるんだよ？ 現に海南に行くのだって、ちゃんとした理由がある」

「ほーう。ちゃんとした、ねえ……」

「そうだよ。だって、海南は、海南大学の隣にある、付属の高校だろ？」

「だから、『海南大附属高校』って名前なんじゃねえのか？」

「そう。海南大学といたら、ここらじゃ有名な大学だよ。医学部だってあるし、付属の病院だってある」

「そうだな、それが？」

「だから、越野を連れてきたんじゃないか」
「なんのために」

やる気のない、だらりとした口調の越野に溜息を返し、嘆かわし
いと顔で訴え、仙道は言う。「まだわかんない？ 大学病院がある
んだよ。病院があるの。びよ、う、い、ん」

「病院……？」

「そう、病院」

「病院！」

越野はそこでやっと気が付いたのか、そう叫ぶ。

「そうか、病院か。病院へ行けば、きっと何かが分かるかもしれないんだ。」

仙道、俺はお前の事を誤解していたよ。何ていい奴なんだお前は」

「そう、やっと分かってくれた？」

「ああ、いま分かった。なんだかんだ言って最後で頼りになる奴だ
って、いま分かったよ」

越野は目を輝かせながら仙道の手を握り締め、涙を流さんばかり
の顔で仙道を見つめる。まるでそれが選挙に当選した直後の政治家
のようなものではあったが、それでも女の子と化した越野は可愛く、
何をやっても許される気がする。

「じゃあ、早速海南に行こう」

「ああ！」

元氣を取り戻した越野は力を込めてそう言い、海南へ向かって歩き出した。

が、しかし。

結局仙道は極悪非道のろくでなし、どうあがいても常人には理解できない思考回路の持ち主だと言うことを、越野はその直後、思い知らされた。

うまいこと言って越野をその気にさせ、海南まで自分の足で歩かせたあと、仙道は海南大学付属病院の玄関を横切ると、高校の方へ入って行ってしまったのである。

「ちくしょう、放せ。仙道っ！ 何で病院へ行かねえんだっ。何で高校へ行くんだっ！」

そう散々わめいたが、こういうときの仙道の耳というのは、耳に綿でも詰めているのかというほど聞く耳持たず、全く聞き入れる様子はない。

そして越野は結局仙道の思惑通り「お釈迦様の掌の上で動き回る孫悟空」状態となるのであった。

「どうして俺はいつも、いつも、いつも、いつも、いつも、いつも、いつも、いつも……」

「いつも」を延々と繰り返して、そして最後に叫び声を上げる。

「こんなメにばっか遭うんだあ！」

「それは越野だから」

さらりと言った仙道は、につこりと笑顔を浮かべながら越野の顔を覗き込み、相も変わらず「越野可愛いよなあ」などと、時折呟いている体。

それを思い切り拳で殴り付けて、越野は怒りの余り声を低くして
それでも男の時とは比較にならないほど高い キツパリと言
う。

「いや、俺がいつもこんな目に遭うのはお前のせいだ」

そして今度は怒鳴りながら。

「そう、すべてはお前のせいなんだ。そうに決まってる。そうに違
いないっ！ 太陽が東から昇るのも、郵便ポストが赤いのも、電信
柱が高いのも、すべてお前のせいだあっ！」

「こんな所でそんな事言っと、行きたくなくても病院行きが決定に
なりそうだよ、越野。……………ただし、別の科の」

「うるさいっ！」

「あーあ……………怒りのあまりおかしくなっちゃってる。さ、越野。行
くよ？」

それを溜息一つでかわすと、仙道は越野の肩を抱いて、もがく越
野を無理矢理海南大学附属高校へと連れて行くのであった。

*

*

*

「何しにきたんだ、仙道」

……………湘北と同じような手順でうまく牧を見つけ、仙道は越野を連
れたまま牧に挨拶をした、その反応がこれだった。

「つれないこと言わないで下さいよ、牧さん」

「だから何しにきたんだ仙道。今は平日午前で、創立記念日でなけ
れば間違いなく、一般高校生は学校で勉強している時間帯のはずだ
が？」

そう言った牧に、仙道はみたび同じ説明をする。

当然牧の反応は、どこの学校でも同じもので、やはり牧は同じよ
うな事を尋ねた。「だから、俺にどうしろと？」

「そこで相談なんですけれど」

言っていて飽きないのか、仙道は同じことを口にした。

「だから、なんの相談だ？ 悪いが俺には何もできない。越野をどうにかしてほしいなら、隣の付属病院へ連れていくのが賢明な対処法だと思うが」

これ以上ないくらい、適切かつ、反論のしようのない台詞を、牧は仙道にぶつける。

さすがに最高学年で、更にはエスカレート式の大学に文句なしで滑り込めるだけの頭脳の持ち主である、と証明するかのようなお言葉である。

さすがの仙道も、牧の言葉に返す言葉を見つけられず、絶句する始末。

「で、用がないのならば俺はすぐにも次の授業の準備にとりかかりたいのだが？」

「……次、なんの授業なんです？」

「お前には関係ないだろう」

「そんなこと言わずに、教えて下さいよ。もうこれで帰りますから
尚も食い掛かる仙道に、牧は溜息一つして答える。

「……美術」

「……？」

仙道の脳はほんの一瞬、思考をストップさせた。それは隣で仙道に掴まったまま動けずにいる越野も同様だったが。

「美術……ですか？」

「そつだ」

「牧さんが……美術……」

呆然と言った仙道に、牧はほんの少し不機嫌そうに「それがどうした」と言っ。

「芸術選択の授業数で決まっているだろう。俺はそれで美術を専攻しただけだ」

「でもなんか……考えられませんね」

いつも牧と対峙する時は、ユニフォーム姿、もしくはジャージ姿が大半であったから。時折見たのは今と同様、制服の姿であるが、それにスモッグを羽織っている牧（更にはベレー帽を被って色とりどりの油絵の具のパレットを持つている姿……単にこれは、仙道の想像過多ではあるが）なんてものが頭に浮かんで、仙道は吹き出しそうになるのを必死で堪えた。

「何を考えているかは知らんが……早く学校へ戻った方がいいと思っぞ」

そう言つて、牧はこの迷惑すぎる相手に背を向けようとした時、「牧さあん」

と大声で叫びながらこちらに走ってくる者がいた。

自称「スーパールキー」こと、清田信長である。

清田は後ろに大男を従えて……と、いうより大男の方が走ろうとしていないため、自然に後ろになっただけのようだ……牧の側まで寄つてくると、息を切らしながら牧に言った。

「今日の練習の件なんすけど……」

そこで仙道の存在に気付き、叫び声を上げる。

「ゲツ、仙道。なんで海南に……！」

そう言つた清田に追いついた大男、神は、いち早く仙道に気付くと愛想笑いを浮かべて「おや仙道」などと呑気に言う。

「どうしたんだい、こんな所にくるなんて」

そう尋ねた神の言葉に、仙道は瞳を輝かせた。

それを見て牧は、大きな溜息をつくことしかできなかった。そしてそれは越野も同じであったのだ。

せっかく仙道が帰ろうとしていた矢先に、結局仙道の言い様に世界は動いてしまうのである……。

Act 6 陵南高校

結局その後、仙道は神と清田にも牧と同様の説明をし、相談を持ち掛けた。

そこで一騒動を巻き起こし、自分の気が済むと仙道は、越野を引き連れたまま海南を後にした。

そしてようやく陵南高校に辿り着いたのである。が、しかし時間はすでに昼休み直前になっていた。

「遅れてすみません……」

越野が心底すまなさそうな声でそう言いながら教室に入った途端、クラスメイト全員がどっと押し寄せる。

「ああ、よかった」

「無事だったんだ」

「てつきり何かあったと思って、心配したのよ皆」

そう口々に言われ、越野は訳が分からずばかんとしてしまう。要するにクラスメイト全員は、昨日あんな事があって、越野が学校に来ていない訳は……。

1 / あの煙の作用で死んでしまった。(偶然にも毒ガスの副作用で性別が変化した後、やはり死亡してしまった)

2 / 昨日の出来事にショックを受けて死亡した。

3 / 今日になっても性別が元に戻らず、世をはかなんで自殺してしまった。

4 / 上と同様、世をはかなみつつ、ひっそりとどこかに隠れ住むためこの町を後にした。 5 / 上と同様、傷心(もしくは元に戻る方法を探すため)の旅に出た。

の、どれかに違いないと考えていたようである。

まさか仙道が自分を引つ張り回して、色々な所へ連れていっていったなどとは誰も考えていないであろう。

「でも良かったあ……本当に無事で」

「俺は無事なんかじゃねえよ」

「でも、生きているだけマシって事もあるじゃない。死んじゃったら、もう何も残らないんだから」

「……まあ、そうだな」

そう言った越野に、クラスの女生徒はにっこりと笑って言う。

「そうよお。きっとこれからいい事あるって」

「そうかな……そうだよな」

越野はそう呟いて、自分の事を心配してくれていたクラスメイトの存在をありがたいと思いつつながら、笑顔を見せた。

「だっ……だまされた……っ！」

この台詞は、放課後部室へ向かう途中、越野が言ったものである。

「何が『これからいい事ある』だ、ちくしょう」

乱暴に歩きながら、越野は昼休みから放課後までに起こったことを思い出す。それで再び怒りや悔しさが増して、歩き方は更に乱暴になった。

「なんだかんだ言っつて、結局みんな俺がこんな姿になったのを面白がってるだけじゃねえかよっ！」

なぜこんなにも越野が荒れたかと言うと……要するに「これからいい事あるわよ」などと言った女生徒が、自分の仲良しグループの人間と一緒にあって、越野を散々おもちゃにしたからである。

女生徒は寄つてたかつて越野を取り囲むと、嫌がる越野の制服を

はぎ取り、

「似合うから」などと言いながら女子の制服を着せ、更には化粧までさせると写真を撮って楽しんだのだ。

「なんて可愛いのっ！」

「普通の口より可愛いなんですよ」

「あつ、私より越野くんムネがあるっ！」

「プロポーションよすぎよねえ」

などと、越野を囲んで女性とがいろいろ弄んでいるのを、男子は哀れんでいるような、羨ましがっているような顔をしながら、助けもせずただ傍観していた。

「ちくしょう、助けるよテメエらっ！」

「越野くん、駄目だよ。そんな可愛い顔してるのにそんな言葉じやあ」

「俺は男なんだあ！」

「それは昨日までの話。今は女の子なんだよ。ちゃんと自覚しなきゃ、男子が困るでしょ」

「そうだ！ せっかくだから、これから越野君のこと、『ヒロちゃん』って呼ぼう」

何がせつかなのか、女子はそう言うのと勝手に物事を決めていく。越野のことを「ヒロちゃん」と呼ぶこと、越野はこれから女子の制服で生活すること、もちろん体育などは女子とすること……などを決め、それをクラスに「御触れ」として定めた。そしてクラスは満場一致でこれに賛成し、していないのは本人である越野唯一人だけである。それは早速次の日から実行されることとなった。

「ああ……明日までに元に戻りてえ」

心の底からそう願う、越野は部室へと足を進める。が、その足取りは必然的に重くなっていた。なにせこれから会いたくもない仙道と顔を合わせなければならぬからだ。

「いつものように遅刻するか……サボってくれればいいのに……」
そう言った越野の願いは、多分叶うことはないだろう。

*

*

*

越野は今までこれほど自然の摂理というものを恨んだことはない。
「ああ。なぜ朝はくるんだ。なぜ永遠の闇はないのさあ」

哲学者、もしくは胡散臭げな宗教家でもなければ絶対に口にするはずもないような怪しげな台詞を口にしながら越野はいつものように目を覚まし、そして着替え　もちろん男子の学ランである。ただし学校へ行けば昨日の「御触れ」の通り女子の制服に着替えさせられることは目に見えているが　　ると、階下へ降りる。

「おはよう」

食堂では、母が朝から元気良く台所に立って味噌汁を作っている。そしてテーブルでは父が新聞を読んでいる。妹は朝から騒ぎながら洗面台で身支度を整えている。典型的な、一般家庭の朝の風景だ。

……いつもなら。

これで自分が男で、早朝ランニングから帰って来てシャワーさえ浴びていれば、間違はなく、いつもと同じなのだ。自分が男なら。

「あら早いわね、宏明」

くるりと振り返って母はそう言うと、顔をしかめる。

「うーん。なんだかその顔じゃ、しっくり来ないわねえ名前が」

「勝手にほざいてる」

「その言葉遣いも」

「俺の知ったことじゃねえ」

そんな会話が続いたが、いつものように朝食が始まり、テーブルを囲んで食事を食べる。そしていつもより早めに、越野は家を出ることにした。

「おっは、よ！ 越野」

越野が女の子となつてから、なぜか仙道は早起きになつたようで、玄関を出るとすぐに、仙道はもうそこで待ち構えていて、越野の顔を見るなりにつこり微笑んでそう言った。

「……でた」

「お迎えにきたよ越野。さあ俺と一緒に学校へ行こう」

「どこの学校だ。翔陽か？ 湘北か？ 海南か？」

「なーにいつてるの、もちろん陵南に決まってるじゃないか」

そう言った仙道に疑り深げな顔を見ると、仙道は「さあいこーか」と言つて越野の肩を抱いてすたすたと歩き出す。

どうやら自分の姿がそのままである限りは、こういつた事が続くのだな、と、越野は理解して、自分の不幸を呪いつつ溜息を吐き出した。

*

*

*

「さあ『ヒロちゃん』。着替えの時間よっ！」

そう言つて、教室に入るなり越野は数人の女生徒に取り囲まれて泣く泣くセーラー服を着させられた。

「うーん、やっぱり可愛いわ」

「ほんと。肌なんかすっごく綺麗だし」

「そうそう……このまま街でも歩けば絶対にナンパされてもおかしくないくらい可愛いよね、ヒロちゃん。なんか……悔しいわ」

そう散々酷い目に遭わされながら、昨日会つた藤真が呟いていたことを思い出す。

こういうのには慣れてるから……。よくナンパもされるし。

(藤真さん……人間できてる)

そう思ったが、もしくはこうなる前は藤真も自分と同じような気持ちを抱いていたのではないか。

いや、今でもそう思っているが、それを出さずにいるだけなのは、と考える。それにしても、藤真が「悟り」を開くまで、一体どれだけの苦悩や葛藤があったのだろうか。もしかして、そのうち自分も藤真のように「悟り」を開いてしまつのかも知れない。そこまで考えて、越野は朝から「お先真っ暗」状態となってしまった。「もういやだあ！ こんな事がずっと続くくらいなら、今すぐ死んだ方がマシだあっ！」

そう絶叫してみたものの……。結局セーラー服の似合い過ぎている女の子・越野には、誰も取り合ってくれないのだった(それでも現時点まででこの格好を仙道に見つからないことだけは、彼の些細な幸運の一つである)。

そしてその日一日、越野はセーラー服のまま生活させられた。

越野にとっては、余りにも辛いことの連続であったが、しかし些細な幸運の二つ目は、今日の体育の時間が中止になったことである。

体育の授業前の休み時間に、またもや大勢の女生徒に取り囲まれてブルマーをはかされそうになった時、体育が中止になったと、体育係が告げのだ。このときほど越野は幸運を感じたことはない。

しかし、男子生徒の中には越野のブルマー姿を拝見したかっと思っていた人間がいたようで、少数の男子生徒が越野に隠れて残念そうな表情を見せていた。

そして越野の些細な幸運は、本当に些細なものであった。

それが証明され、越野本人がそう認識したのは、昼休み終了間際。仙道が、午後一番の授業のテキストを忘れ、それを越野に借りに

きたときに、セーラー服姿でいるのを仙道に見つかってしまったのだ。

「こ……越野っ、可愛すぎるっ！」

そう言って他人の目も憚らず、仙道は越野にがばりと抱き付いた。

「きゃああっ！ 仙道くん、大胆っ」

「うらやましますすぎるっ。ヒロちゃん、ずるいわっ」

「私もっ！ 私もそうしてっ！」

などと、黄色い声が飛び交う中、越野一人が泣き叫んでいた。

「もういやだあっ。助けてくれ、俺を今すぐ殺してくれえっ！」と。

一番知られたくない人物に見つかってしまったのであった……。大いに自分の身に起きた不幸を呪いたくなったのであった……。

越野はそれからというものの、何かある度に仙道に纏わりつかれるようになった。

放課後、部室へ向かうとき（いつもなら必ず遅刻するか、或いはサボるくせに、越野が女の子と化したと分かったときからその二つを全く実行していない）、帰るときなど必要以上に付き纏われ、そして更に不幸なことに、越野を襲おうとするのである。

「なにしゃがる、このヘンタイっ！」

「だって、いま越野は女の子だよ？ だからこれは変態でも、なんでもない」

そう言いながら背後から忍び寄りたり、着替えを覗こうとしたり、あまつさえ痴漢行為 と、呼べるものは謎だが を働こうとするのである。

「早く男に戻らなければ……。でないといつかそのうち、俺は仙道に犯されるっ！」

それ以外にも男に戻りたい理由はたくさんあるのだが、このときはそれしか考えられず、そう真剣に思った越野であった。

* * *

越野が女の子となってしまうって二日が経過した。

ほんの一昨日、化学の実験によってなぜか性別が変わってしまったのが、まるで遠い過去のような感じさえするのはきつと、この二日間でいろいろな事があり過ぎたせいだろう。

仙道は、昨日、一昨日と、相変わらず朝早くから越野を迎えにきている。

そして何かあることに「越野可愛いなあ」と呟きながら、よからぬことをしようと企んでいる（と越野は思っている）のだ。

そして越野は、多分仙道という男は、付き合っている女の子に対して凄くマメな態度をとるのでは……と、自分がされていることを例に思う。

それほど、徹底したフェミニスト振りを、仙道は発揮していて、それが越野には腹立だしく感じるのである。と同時にいつ襲われるか分からないという危機感を大きくさせていた。

「池上さん。実は俺……」

そう真剣な表情で池上に言ったのは、午後の部活が始まる前。池上がいつも早めに部室にきているのを知っている越野は、H・Rをこっそり抜け出して部室へ赴き、頼り甲斐のある先輩に相談を持ち掛ける。

ただしその時の格好は悲しいことにセーラー服である。

「身の危険を感じてならないんです」

そう言うってから越野は、近いうち仙道に襲われてもおかしくないのだということ、自分がいま仙道にどうという扱いを受けているの

かを交えながら、事細かに説明する。

「俺だって、好きでこんな姿になった訳じゃない。早く男に戻りたい。でも、もう二日間もこのままだったら、元には戻れないかも知れない。それでも自分はやっぱり今まで生きてきた男としての感覚は無くすことはできない。一体、どうしたらいいんでしょう」

目に涙を浮かべて越野が言つと、突然池上がぎゅっつと越野の体を強く抱き締めた。

「い…っ、池上、さん……？」

「もしこのままでしたら、俺がずっと守ってやる！ だからお前はなんの心配もしなくていいぞ」

「池上さんっ」

「仙道なんかにお前は勿体ない。お前は真面目で素直で本当にいい後輩だ。お前の性別が変わろうが、そんなことはちっとも気にはしない。俺がずっと守ってやるから、お前は何も心配することはないんだ」

「ちよつと……」

「好きだ、越野。俺はお前に惚れた」

「ちよつと待つて下さい、そんな冗談は……っ！」

「冗談なんかじゃないぞ越野。俺は本当に……」

そう言つて込めている腕の力を更に強めようとするのを無理に薙払つて、越野は脅えた目で池上を見た。いつもは冷静で表情を崩すことのない池上が僅かに頬を紅潮させている。「本気……なんですか？」

「ああ。それと植草もな」

ここ最近、越野に対して植草が豹変した態度を取っていた理由がそれで分かった。

植草の場合、越野に惚れたことを口に出さず、ずっと内に秘めていたのだと、池上が説明する。

「ただしあいつの場合は単に恥ずかしくて照れていたほうが大きいけどな」

「そんな……だって俺……」

「今、お前は女なんだ。いくら考え方や態度が変わらなくてもな」
「……………」

「俺は真剣だ」

「俺……ただ単に、相談したかっただけです。もしこのままだったらどうしようって。」

「そりゃ、仙道が俺にちょっかいだしてくるのも困ってるけれど、このままだったらインターハイとかどうなるんだろうって、そう思って、それで池上さんに相談しただけです」

「そう言ったところで、部室の扉が開かれた。」

「話、聞こえちゃいましたよ、池上さん」

扉の向こうで、仙道が壁に寄り掛かりながらそう言った。

「仙道……………」

驚愕の表情を見せながら池上が呟くと、無表情のまま仙道は部室の中へ入ってくる。

そして。

「越野が俺には勿体ないって、どいう事ですか？」

明らかに不機嫌そうな表情と声で仙道がそう尋ねる。

すると、池上は一瞬たじろぎ、それでも言葉を返した。

「言葉そのままの意味だろう。お前のような奴に越野が振り回されていいはずがない」

「要するに、池上さんにこそ、越野が相応しい、と…………？」

「そうは言っていない。ただお前に越野は勿体ない、と、言っただけだ」

「それは、何を基準に、何に対して『勿体ない』んです？」
恋愛に、ですか？

そう言葉を重ねた仙道に、池上は返答を避けた。

「そもそも越野は池上さんに、今自分のおかれている状況の相談をしていたんじゃないか？ それなのに越野に愛の告白をするなんて、不謹慎ですよ。越野がこのまま元に戻れなくてもいいんですか？」

「お、お前がそれを言うかつ！」

そう怒鳴ったのは越野である。

そして越野は大きく息継ぎをすると、弾丸のように言葉を仙道に叩き付ける。

「お前が池上さんにそれを言える立場にあるのかっ！」

昨日『元に戻るかもしれないから』なんて嘘ついて俺を騙して、翔陽やら湘北やら海南やらへ連れ回し、散々俺をおもちやにした拳げ句、『ずっとこのままでもいい』だなんて言って、更にはさっきだって俺のこと襲おうとしたお前がそれを言うのか、ええっ！ なんとか言ってみろ、仙道っ！」

「え……えーと……お」

「何も言えないだろう！ そうだよなっ。お前は池上さん以上に不謹慎すぎる行いをしたんだからなっ！」

そう怒鳴りつけると、怒鳴りつけられた仙道本人のみならず、池上もが黙ってしまふ。それを見て弁解のようではあるが、越野は言葉を加えた。

「池上さん。俺はさっきも言った通りただ単に相談に乗ってもらいたかっただけなんです。だからそんなこと言われても困ります。もし俺が一生このままの姿でいたとしても、俺は気持ちだけは変えられないですから……」

そう言った越野に、池上はすまん、と呟いた。

「お前がどんなにその姿で苦しんでいるか分かっていたのに。それでわざわざ俺を頼って相談してきたのに、自分勝手な考えを押しつ

「けようとして悪かった」

「いえ。もういいです」

「そうか……。本当に、済まなかった。じゃ、俺は着替えて部活を始めるから……」

「そう言うつと、池上はくるりと背を向けた。

「じゃ、俺……見学します」

「そう、微かに微笑した越野に、池上もわずかに目元を和ませた。

「そうか」

「先、体育館にいつてますね」

「越野はそう言うつと、セーラー服を翻して駆け出した。

*

*

*

その日の部活は、なぜかきこちない雰囲気だったと、部員の誰もが思った。

「ここ二日間、真面目に部活に出てきている（とは言え、時間通りに顔を出しているだけなのだが）仙道は、昨日や一昨日のように越野にちよっかいを出すのかと思えば、それもせず、ただやる気のないさそうな顔で

「一応部活動に参加している」と言った程度のことしか行動を起こさないし、それをキャプテンの魚住も副キャプテンの池上も注意すらしない。

「陵南のエース仙道の態度がそんなものだからなのか、必然的に今日の部活にはハリというものが感じられなかった。

「何をやっているんだ、お前は！ そんなことで全国が狙えると思っているのかっ！」 体育館の扉を乱暴に開きながら、監督の田岡はそう怒鳴った。

「監督……」

「何をやっとするんだ、お前らはっ！ インターハイまで時間がないと言っのに、そんなだらけたことをやっていていいと思っっているのか。そんなことで全国に行けるとでも思っっているのか！」

続けて叱咤の声を張り上げる。田岡はこの二日間、用事のために練習に顔を出していないので現在の状況が分からずにいるのか、そう立て続けに部員たちに怒鳴りつける。

「一体何があつた！」

そう尋ねられても、説明は難しく、部員たちは口を開こうとはしない。うなだれたまま何も返してこない部員たちに、田岡は憤りの声を隠さずに再び尋ねる。

「何があつたんだ」

「それが……」

そう、言いにくそうに口を開いたのは魚住。

「何がなんだかおれたたちにも分からないんですけど」と、前置きをしてから、今まであつた不可解な、それでも起きてしまった事実を自分たちの分かる範囲で説明を始めた。時折、他の部員たちの合いの手やら、疑問の声が交じり、結局は收拾のつかない話で終わってしまったが、それは仕方ないことであろう。

「な、ん……だつて？」

「だから、事実だけを言えば、越野が女の子になつてしまった、と……」

言つて、魚住を始めとする殆どの部員たちが、体育館の隅で仏頂面をしている、勝ち気そうな顔の作りをしたショート・カットの女生徒に目を向けた。

「あれが、越野だと言っのか？」

「はい」

「じゃあ、どうするんだっ！」

「何を、ですか？」

「インターハイだつ。あいつがいなかったらインターハイはどうなるんだ。今や越野は、陵南バスケット部に欠かせない人物の一人だ、他

に代わりはいない！」

そう言って、狼狽しながら頭をかきむしる田岡に、部員たちは微かな驚きを感じていた。

そんな部員たちの表情に気付かない田岡は、越野の側まで近寄ると、セーラー服を着たままの越野を凝視し、越野かどうかを確認する。越野が渋々ながら頷くと、狼狽の表情は更に激しいものとなった。

「なんてことだ！」

叫び声を上げて、田岡は越野の肩を乱暴に掴み、そして激しく揺さぶった。

「か、監督、やめてくださいっ」

端から見れば”嫌がる女子高生に乱暴を働くスケベな中年男性の図”である。

「なんだかなあ……」

そして、それを見た部員たちはそうとしか思えず、ついそう呟いてしまったのであった。

緊迫した「陵南バスケット部の一大事」は、その原因を作った監督・田岡によって、もの見事に音を立てて崩れ去られたのである。

*

*

*

そんな、こんなの、ドタバタ騒ぎが収まると、部活の時間は終わっていた。

收拾をつけるかのように、魚住が監督の指示を仰ぎ、田岡が取り繕った言葉を部員に伝えると「ありがとうございます」と全員が挨拶をしたところで、解散となった。

そして、部員たちは肉体的なものより精神的な疲労のほうが大きいまま、その疲れを引き擦って部室へと向かう。

「本当に、どうなっちゃうんだろうな」

部室に入り、着替えをしながら、一年の誰かがそう呟く。

「もしこのままだったら、インターハイ予選通過どころか、陵南バスケ部の士気にも関わるんじゃない……」

「それに、越野先輩の事も」

本当は、それが一年部員の最大の問題点であるのだ。

越野は、いつも仏頂面をしていたり、不機嫌そうな顔をしていたりすることが多いし、仙道を相手にしている時などは苛立った、怒りっぽい態度しか示さないのだが、後輩には案外優しく、一年たちにとっては「いい兄貴分」として信頼されているのである。

「本当に困るで、そしたら。スタメンの越野さんいなかったら、えらい大変なことになりますよって」

「だよなあ……」

彦一の言葉で、越野が陵南バスケ部において重要不可欠なことを再認識し、また問題点を増やして溜息まじりでそう言う。

「まさかマネージャーに転身するほかない、とか？」

「でも……もし元の姿に戻っても、今まで通りに接する事できないかもしれない、オレ」

「うん。すつごく可愛いんだよな……って、これ、越野先輩に聞かれたら、殺されるかもしれないけど」

一年の部員たちは声をひそめながら、輪を作ってそう話し合っている。

その輪から外れたところで、三年の池上と魚住がスタメンたちと着替えをしているが、そこでも似たような会話が展開されていた。

「ところで越野」

「はい？」

……ある程度着替えを済ませた魚住が、越野に声を掛ける。

「なんでセーラー服なんて着てるんだ？」

「……………」

「それは、女の子に目覚めたから」

と、言ったのは仙道。

にっこり笑顔を浮かべて　先程の池上との会話なんてものは、完全に忘れ去ったようである　「越野はやっとこれで女の子として生きていく決意をしたんだよ」と続ける。

「そんなんじゃない、ないっ！」

「じゃあ、俺の気を引くため？」

「バカヤロウっ！　強制的に着させられたんだよっ、クラスの女どもに！」

植草、頼むから一緒に説明してくれ！」

そう叫んだ越野に、植草は首まで赤くすると、大袈裟なほど激しく首を振る。

「なにやっつてんだ、お前？」

「……………」黙ったまま、植草はただ首を振り続けている。

どうやらそれが植草なりの「照れ」の行動だと、越野は悟り、彼が使い物にならないと確認して、越野は大きな溜息を吐き出す。

それから仕方なしに、自分で説明を始めた。

「クラスで……勝手に『お触れ』なんてもの決めやがって、それで俺はこんな目に……………」

「でも、似合っつてて可愛いよね」

「そんなこと言っつたって、俺は全然嬉しくなんてなんねえ。むしろ情けなさで涙が出るぜ」

「でも、泣いたときの越野の顔、これも可愛い」

そう、軽口……仙道にとっては褒め言葉であるらしい……を言う　と、越野は怒りで身体全体を震わせ、

「いい加減にしやがれっ！」と怒鳴って、仙道に拳を叩き付ける。

「しくしく……ほんとおに女の子になっちゃったんだね、越野。俺は嬉しいけど、同時に悲しくもあるよ」

そう言っつて泣いたフリをする仙道に、怪訝なそんな表情と声で越野は尋ねる。

「なんでだ」

「背は……こおんなに縮んじゃうから、前と違って俺に釣り合わない
くなっちゃってるし、手足も前より短くて、細くなっちゃってる。
でもって、全然力がなくなってるんだよ？ 筋肉までなくなってる
し。前は本気で殴られたら痛かったけど、今はどんなに思いつ切り
叩かれても、痛みなんて感じられない。俺はそれがとっても悲しい」
「なんだって？」
「だから、全然力がなくなっちゃってるんだってば」
「そんな……」
「女の子だから、仕方ないのかもしれないけど……でもなんか拍子
抜けして俺は寂しい」

「……………」
仙道が泣くフリを続けながら言った言葉に、越野は絶句させられ
た。

性別や、姿ばかりでなく、身長も縮み、更には力までもがなくな
ってしまうとは……。もう、為す術もないのでは。越野は絶望的に
そう考える。それから拳を固めてそれを振り上げると、渾身の力を
込めて仙道に振り下ろした。

「しくしく……やっぱり痛くない」

「そ、そんな……」

「やっぱり本当に女の子になっちゃってる。ある意味悲しいよ、俺
は。越野に叩かれるの、結構楽しかったのに……痛みを感じないな
ら、楽しみはなくなっちゃう」

そう言った仙道に、周りはざわめく。「もしかして仙道……アブ
ナイんじゃないのか？」

それを耳にして、仙道はぴたりと泣く振りをやめた。どうやら単
に越野に構われるのを楽しみにしていただけのようである。越野に
とってはそれも嫌悪感の一つになるものではあるが。

「でも……嬉しいこともあるから、よしとしなくちゃね」

そう、今までの表情を豹変させ、笑顔を浮かべると仙道は軽々と
越野の体を持ち上げる。

「何しやがる、仙道っ！」

「体重も軽くなっちゃってるんだね。こんなに簡単に持ち上げられるとは、思いもしなかったよ。でも……いいことだね」

「何がいいことなもんか！ 早く降ろせ、このばかやろっ！」

そう叫び、じたばた手足を動かすが、仙道はなんとも感じていない。

「そうか……」

ほくそ笑みながら一人ごちる仙道に、何か不穏なものを感じ、越野は暴れる。しかし仙道の力は凄まじく強く、逃れることは不可能だった。

「こんなに軽々と持ち上げられて、更に力もない。となると……簡単でいいな」

「何が『簡単でいい』んだ、なにがっ！」

「……………」

「……………」

越野は仙道の言葉を聞き、更には無言のままほくそ笑んでいる仙道を見て、背筋が寒くなるのをはつきりと感じた。

「や……やめろっ。放せよ、仙道っ！」

「ふふふふ……………」

「誰かつ！ 頼むから俺を助けてくれっ！」

仙道にすっかりと捕らえられたまま、越野はそう絶叫した。がしかし、越野を助けられる というよりは仙道にかなう 者はこの中には存在しないのであった。

そして部活が終り、着替えが済むと 越野はあれから学ランに着替えた 越野は自分のもてるすべての力を総動員して自転車をこぎ、急いで家路についた。

ここ数日、早朝ランニングの日課をサボったためか、それとも女の子になってしまった副作用のためか、力は半減していて、学校から自宅のちょうど中間地点ですでにペダルをこぐのすら億劫になるほど疲労していたが、仙道が変質者のように不気味な笑みを浮かべながら追いかけてくるのを想像し、ない力をふり絞るようにして、競輪選手さながらのスピードで家に辿り着く。

その頃には完全に力を使い果たし、越野は玄関扉を開くなり、三和土に座り込んで、約10分間は動くことができなかった。

「やばい。マジで俺の身が危ない」

息を切らせながら越野は、そう呟く。

これから女の子として、諦めながらも必死に生きていくか（ただしこの場合否応なしに仙道に付き纏われるのは必至である）、それとも、仙道になにかされる前にここで命を絶とうか。

今日起こった部室での事件は、ある意味で越野のこれからの人生の分岐点でもあると、彼は切実に、そして真剣にそう思っていた。

エピローグ く終焉く

「宏明い……時間よ、早く起きなさい」

母の声で越野は目を覚ます。

自分の姿はもとより、性別すら変化してしまった越野は、なぜか男であったときの習慣である早朝ランニングをストップさせてしまう結果となり、今では……と言ってもたった三日程度の事なのだが……寝坊が日課となってしまうている。

「う……ん……」

気怠そうな声を上げて寝返りを打ち、それから越野はゆっくりと体を起こす。

これから憂鬱な一日の始まりだ。

そう呟いて、寝間着のまま階下へ降りる。

「おはよう、宏明。ここ三日、寝坊続きね」

台所でネギを刻んでいる母が、その手を休めて振り返りながら言う。

「あら、宏明、よかったじゃない」

越野の姿を見るなり、母はそう言って笑顔を見せた。

「なにがだ」

「鏡、見にいってごらんなさいよ」

そう言われて越野は緩慢な動作で洗面所へと向かう。そこで母に言われた通り鏡を覗き込み……喜びの絶叫を上げた。

「やった あつ。元に戻ってるぜっ！」

それからの越野の態度は昨日までとは全然異なり、意気揚々としたものだった。

なにせ、昨日学校から戻ってきたときの彼は、女の子として生きるか、それともここですぐに死ぬか、という大問題を抱えていたか

らである。

それが、どちらを取るのも嫌だった「究極の選択」をせずにすんだのだ、どちらを取ることもなく、最良の結果が。

「これで俺の人生は、薔薇色だっ！」

越野は鏡を再び見つめ、自分の姿が本当に男に戻っているのを確認してから、そう歡喜の声を上げたのである。

*

*

*

「しくしく……元に戻ってるう」

仙道のこの台詞は、ほんの三日ばかりの習慣だった「朝のお迎え」が今日も実行され、仙道が自宅の玄関を開けた越野の姿を見たときのものである。

が、実はこれで137回目。

仙道は越野の家から学校へ向かっている今までに、すでに数えて136回、同じことを呟いて、本当に悲しそうな表情をしたのだ。

「しつこいぞ、仙道！」

越野は「うるせえ」「いい加減に黙れ」「馬鹿野郎」などとバリエーション豊富に仙道に返しながらも、137回目にこの言葉を選んだ。

しかし、そう怒鳴りながらも、つい顔がにやけてしまうのは、この喜びがそれだけ大きいという証拠であろう。

「せえっかく越野が女の子になったんだから、今度の日曜にデートでもしようって、計画練つてのに……。遊園地行って、映画見て、ご飯食べて、買い物して……」

ぜんぶおじやんだ。

そう呟いて、仙道はがっくりと肩を落とす。

「ざまあみろっ。お前の思う通りにこの世は回んねえんだよ!」
もはや勝者の声で、越野は言う。それを聞いて、仙道は相変わらず
「しくしく、元に戻ってる」と、呟きを繰り返していた。

学校に着き、越野は久し振りに朝練で汗をかく。

「やっぱ男っていいなあ」

と、部活の間じゅう、思い付いたようにしみじみとその実感を嘯
み締め、越野は呟く。

魚住を始めとするバスケット部員の多くは越野も姿が戻ったことに、
一緒になって大喜びをしていたが、なぜか、池上と植草の二人は複
雑な表情をしていた。そしてその間じゅう、仙道は幾度となく例の
言葉を繰り返しているだけであった。

「あーっ、越野君、元に戻ったんだあ」

朝練を終え、教室に入るとクラスの女子がそう黄色い声を上げる。
それを聞いて教室にいた人間の殆どが越野の周りに集まった。

「よかったねえ」

「本当。でも、どうやって元に戻ったの？」

「でも、女の子のときも可愛かったよねえ」

「そうそう。あのままでも、俺はよかつたけどな」

「そう。で、越野と付き合おうかなあ……なんて」

などと、様々な声が越野に掛かる。それを半分は嬉しがりながら、
もう半分は不機嫌に思いながら 内訳はもちろん分かっているこ
とだろうが 越野はその一つ一つに返事をした。

今、誰が何を言おうと、結果的に越野は元の姿に戻れたのだ。だ
から、そんな事でいちいち腹を立てても仕様がなない。そう越野は思
い、そしてどんな事を言われても笑顔で返事をしたのだった。

昨日までは、自分の姿の事で大いに悩み、時には死を選ぼうと考

えたことすらあった。今ではそれがとても馬鹿げている考えであると、笑うことができる。それでも、あの時はそう真剣に考えるほど、自分は悩み、そして男でありたいと願ったのだ。

元の姿に戻りたい、と。

今は、もう悩むことはない。悩みのすべては解決されたのだ。

きっとこれからは、輝かしいほどの未来が待っているに違いない。

そう越野は、クラスメイトに囲まれながら思っていた。と同時に「きっとあれは夢か何かに違いない」と、越野は自分に言い聞かせてもいた。

オマケ

越野が元の姿に戻ってからしばらくの間、ひっそりと起きていた事実は以下の通りである。

1 陵南高校内に於いて「あの可愛い娘は何処だ」と噂が流れ、ある者は高校内を

徘徊して、その女の子の所在を探し回り、ある者は芸能プロダクションや雑誌社に

「可愛い女の子がいる」と情報を提供した。

3 そのせいで一時期、陵南高校付近には、そのテの業界人がたむろしたという。

2 越野をよく見知った生徒たちが、化学の実験の際に使用した薬品の調査を

越野には内密に、化学教師に尋ね「越野を女の子にする会」なるものを結成したという。

3 上と同じく、平行して「女の子・越野の親衛隊」が結成された。

4 越野と同じクラスの女子が、越野が女の子であったとき撮った写真を

「越野親衛隊」たちに暴利で売りつけ、いい稼ぎにしている。

と同時に枚数売りでなく、「写真集」にして、更に稼いでいるという。

5 また、その写真を投稿するものも出てくるようになった。

6 数日後に迫ったインターハイ予選に向けて、陵南バスケット部は猛練習を再開した。

田岡は越野の姿が戻ったことに感涙し、仙道に特別コーチにくよう命令を下した。

そのお陰か、越野はバスケの腕がわずかながら上達したのである。

7 そして数日後に始まったインターハイ予選の時、仙道に越野が女の子であった頃に

連れ回された三校（翔陽・湘北・海南）から、色々と変なことなどを言われたり、

またその学校の部活内で、尾ひれが付き奇妙な噂となって越野を好奇心一杯の目で

見学にくるものが続出した。

越野はその度に、怒りや悔しさで体を震わせっぱなしであったが、そのせいか、陵南高校は稀に見る快拳で予選を勝ち続けたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9549e/>

CHANGE TO THE GIRL

2010年10月9日05時29分発行